

【報告】

## 若者の投票率向上をめぐる検証と対話

### 青森大学における「ヤングフォーラム 2023」の実践から

Verification and Dialogue on Increasing Youth Voter Turnout;  
From the Practice of "Young Forum 2023" at Aomori University

櫛引素夫<sup>1</sup>, 池田修真<sup>2</sup>, 大野愛梨<sup>1</sup>, 加藤未宙<sup>1</sup>, 木村拓海<sup>1</sup>,  
高橋優誠<sup>1</sup>, 藤田奏<sup>1</sup>, 三浦紗綾<sup>2</sup>, 山田青空<sup>3</sup>

1 青森大学社会学部

2 青森大学総合経営学部

3 青森大学ソフトウェア情報学部

#### Abstract

“Young Forum 2023” was held in November 2023 in the “Special Career Practice” course at Aomori University. Organized by the Aomori Prefectural Election Administration Committee, the event was to consider how to understand the low voter turnout among young people and what countermeasures to take. The results of two months of classroom dialogue and research by students were reported. The results of interviews with Aomori prefectural assembly members revealed that they, too, view low voter turnout as a problem, and that they see hope in expanding experiential sovereignty education and utilizing the Internet. The results of the student survey also confirmed that one out of three students has never voted, and that there is a strong desire for online voting and measures for young people. While many students are unable to vote because they have not moved their residency, many students are unaware that there is a system that allows them to attend the coming-of-age ceremony in their hometown even if they have moved their residency, providing suggestions for future measures.

**Keywords**; Aomori University, Aomori Prefecture Election Management Commission, poor turnout, sovereign education, questionnaire survey

#### 1. はじめに

青森大学は特に 2016 年の 18 歳選挙権施行後、主権者教育の強化に取り組んできた。

2023 年には、その一環として、青森県選挙管理委員会・青森県明るい選挙推進協議会が主催する投票率向上の啓発イベント「ヤングフォーラム 2023」を開催した。青森・むつキャンパス生を対象としたアンケートや県議・市議インタビューを通じて、若者の意識、選挙制度の構造的問題と若

者のニーズのギャップ、当面の課題について探った。

本報告は、ヤングフォーラムの開催経緯と概要、さらにはアンケートの詳細を記述することを目的とする。

#### 2. ヤングフォーラム開催の経緯

本学の主権者教育の背景には、全国的な投票率の低下に加えて、青森県の投票率が全国最下位ク

ラスに低迷している事情がある(櫛引ほか, 2022)。

危機感はメディアにもあり, 2022年7月の参院選に際してはNHK青森放送局から投票率向上に向けて協働の提案を受けた。検討の結果, 授業を舞台に全学生を対象とした意識調査を企画し, 若者が投票しない理由や選挙・政治への意識, 投票する学生・しない学生の差異と背景などを明らかにした。

このデータおよび学生とのディスカッションに基づいて, NHK青森は特集番組を放映し, その記録をウェブサイトに掲載した<sup>1)</sup>。また, 経緯や分析結果は青森大学附属総合研究所の「総研だより」第4巻第1号および紀要第24巻第1号で報告された(櫛引・2022, 櫛引ほか—2022)。これらの取り組みは学内外から一定の評価を受け<sup>2)</sup>, 学生の間からも継続的な取り組みを希望する声が出た。

2023年は6月4日に青森県知事選, 青森市長選が同時に実施され, それぞれ投票率が57.05%, 58.86%と過去20年で最高を記録した。青森大学は5月12日, 市長選立候補予定者3人を招いて政見を聞く特別授業を実施したほか, 前年の参院選と同様に「キャリア特別実習」(総合経営・社会・ソフトウェア情報, 1~4年生混成)の授業で継続的に選挙の話題を取り上げた。

さらに同年7月, 青森大学櫛引研究室は青森県選挙管理委員会から「ヤングフォーラム2023」開催の打診を受けた。このフォーラムは例年, 県内各地の大学がホスト役を務め, 例えば複数大学の混成メンバーがワークショップ等を通じて若者の投票率向上策を検討, 提言する構成で実施されてきた。

上記のような経緯を踏まえて検討した結果, 本学では単発型の催しではなく, キャリア特別実習において継続的テーマとして取り上げ, コアメンバーを募って企画や構成を検討することにした。

7月末の授業で取り組みを予告, 9月半ばに準備を本格的にスタートさせ, 最初1人だったコアメンバーは最終的に3学部の1~3年生8人となった。県選管の担当者が毎週のように授業に参加し, 履修者と対話したほか, コアメンバーたちとはTeamsで打ち合わせを重ねた。その結果, 県議・市議へのヒアリングおよび学生アンケートを企画の柱に据えることになった。

フォーラムで氏名や党派名を明かさない条件で数人の候補者にヒアリングを打診し, 県議2人,

市議2人への話を聞くことができた。また, アンケートは青森キャンパス生とむつキャンパス生約1,200人を対象に実施し, 247人の回答を得た。

### 3. ヤングフォーラムの様子

フォーラムは11月1日, 「この1票で変えよう 目指す未来をどう描く?」をテーマに, 「若い世代の選挙・政治に対する関心を高める方策を, 若者自身が探る企画」として, 青森キャンパスとむつキャンパスをZoomで結んで開催した。対面とオンラインで学生・教職員・各市の選挙管理委員会職員, 県議・市議, さらに弘前大学の大学院生ら約50人が参加した。

内容は①経過報告②市議・県議インタビューからの考察③青森大学生アンケート結果の検討④むつ市選挙管理委員会へのヒアリング結果⑤青森県選挙管理委員会からの報告⑥意見交換—という構成とした。以下, ②~⑤について要約する。

#### 【市議・県議インタビューからの考察】

学生たちはインタビューの結果, 市議・県議の意識のポイントを次のようにまとめた。

#### ▽投票率低下の要因

- ・小選挙区制の導入  
(死に票が増えるため投票を忌避)
- ・当事者意識の低さ  
(主権者教育の問題)
- ・心理的抵抗感  
(政治にワクワクしない, 希望が持てない)
- ・候補者を知らない

#### ▽対策

- ・教育面: 体験型主権者教育の拡大  
(模擬投票など<sup>3)</sup>)
- ・制度面: 利便性向上  
(期日前投票所の増設, インターネット投票の実現)
- ・議員の努力: SNSでの積極的な情報発信  
(若い議員の増加への期待)

#### ▽主権者教育をめぐって

- ・他県や他自治体での事例: 子ども議会や出前講座の開催, 議員との話し合いの実施・拡大

#### ▽青森県の現状と課題

- ・高校生議会(実施済み)の役割
- ・子ども議会, 模擬投票(小中学校対象)<sup>3)</sup>の



図1 ヤングフォーラム当日の様子①



図2 ヤングフォーラム当日の様子②



図3 ヤングフォーラム当日の様子③



図4 むつキャンパスの様子

問題（政治的中立性の確保，前例主義）

議員の間にも「自分の学校の校則を変えたり，模擬投票を行ったり，実際に社会を変える体験をすることが一番の主権者教育になるのではないか」という意見があったという。また，今回のインタビュー対象者は全員，SNSを活用していたが，ほとんど活用しておらず，どう対処してよいか分からない議員も少なくないという。さらに，供託金の問題と被選挙権年齢の高さを課題として挙げる議員もいた。

インタビューを担当した学生からは以下のような感想が聞かれた。

- ・議員との話し合いの機会がもっと増えればよい。
- ・教育は0から1を生み出すのに最適な役割を果たせる。
- ・若いうちから選挙に実際に触れる機会をつくるべきだ。

- ・世代の意識の格差をなくすことが大切。
- ・私たちの暮らしと政治がどのように関係しているのかを考える機会になった。

【青森大学生アンケート結果の検討】

アンケートの詳細な検討は第4章で行うが，回答者のおよそ3分の1が投票に行ったことがないことが分かった。また，「成人式に出席するため，あえて住民票を移さない若者がいる」とされる状況を考慮して「住民票を移しても地元の成人式に出席できる制度」について認知度を確認したところ，4分の3が「知らなかった」と答え，今後の対策について検討の余地がある現状が浮き彫りになった。

担当した学生からは，以下のような指摘があった。

- ・アンケートではSNS活用の提案が目立った。しかし，選挙に関する投稿さえすればよいと思っ

ている人もいる。

- ・「あなたが選挙に出るならどんな公約を掲げるか」という質問に対しては、税金や給料、暮らしやすい平和など現実的な内容を公約に掲げる学生もいれば、未来のための内容を公約に掲げる学生もいた。選挙にだけとられず、ふだんから家庭や教育機関で、選挙や政治に関わる機会を設けるべきだ。政治を知らなければ、どんな政策が実現可能かという判断すら難しいのではないか。
- ・今回のアンケートからは、正直に学生から意見を聞くことができたため、学生が政治選挙に対してどこまで理解しているのか把握することができた。例えばSNSという言葉も、若者とそれ以外の人では捉え方が異なるのではないかという部分も理解できた。

#### 【むつ市選挙管理委員会へのヒアリング結果】

むつキャンパスの学生たちは、むつ市選挙管理委員会に対するヒアリング結果をめぐり、以下のようにまとめた。

- ・若者の投票率が低く、特に2023年10月の市議会議員選挙では20～24歳が30%に達していない。
- ・対策として期日前投票や出前講座、投票箱の小中学校への貸し出しを行っている。意識を高める、身近に感じてもらうことが目的。
- ・むつ市では全体の半分以上が期日前投票を行っている。
- ・投票所には張り詰めた空気感があり、行きづらいと思う人もいると思う。簡単なBGMを流すなどの工夫による雰囲気づくりが大切ではないか。

#### 【青森県選挙管理委員会からの報告】

県選管の担当者からは以下のような報告があった。

- ・2023年知事選の投票率は50.7%と2003年以来の50%超えになった。
- ・今回の知事選で60代後半は7割が投票に行ったのに対し、10代と20代前半は7割が投票に行かなかった。
- ・18歳選挙権に関する調査で「投票に行かない理由」に挙げられていた上位は「投票所に行くのが面倒」「選挙にあまり関心がない」、そして「今

住んでいる市町村で投票できなかった」だった。3番目は恐らく住民票を移していないケースであろう。

- ・ネット投票を希望する意見も聞くが、例えば大規模な通信障害が起きたらどうするか。また、どこでも自由に投票できるようになる半面、密室で特定の候補への投票を強要される恐れもあり、まだまだ課題がある。
- ・投票所に行くのが面倒、投票日は忙しい、といった事情なら、期日前投票の利用を検討してほしい。
- ・6月の知事選の際は「あおもりこども選挙」という投票体験のイベントを行った。また、選挙の出前講座、住民票移動に関する周知チラシ配布、障がいを持つ人向けのコミュニケーションボード作成といった取り組みを実施してる。

このほか、経過報告で筆者（櫛引）は「若者の低投票率は若者だけの問題ではない。大人全体の問題として、若者の声を聴き、粘り強く働きかけることが重要」と提起した。

#### 4. アンケート結果の検討

アンケート結果の概要はフォーラムで担当学生たちが報告したほか、櫛引（2023）でごく簡単に紹介した。本章では詳細な検討を行う。表1に質問項目を示した。

なお、回答者は247人だったが、投票行動に関する検討は、日本の選挙権を持つ243人を対象とした。また、設問はあえて2002年に実施した参院

表1 質問項目

- ▼学部
- ▼所属キャンパス
- ▼年齢
- ▼性別
- ▼今まで選挙に行き投票したことはあるか
- ▼投票に行こうと思った理由（3つまで）
- ▼投票に行かない理由（3つまで）
- ▼現状の選挙の仕組みで変えてほしいこと
- ▼地元の人式に出るために住民票を移さない人がいると言われます。住民票を移しても地元の成人式に出られる地域があることを知っていますか？
- ▼若者の選挙離れ、あなたならどのような方法で防ぎたいですか？
- ▼もしも、あなたが選挙に出馬することになったら、どんな公約を掲げたいですか？
- ▼その他、伝えたいこと



選時のアンケートと統一しなかった。理由は大きく、①本年度の履修者の判断を尊重した、②1年をおいての調査で回答者が重複し、類似した回答傾向になる可能性があり、これを少しでも統制する必要がある、の2点である。

図5～7に回答者の属性を示した。回答者数は2022年調査（以下、前回調査）の292人に比べて17%少ないが、薬学部生の割合が前回の6.8%から4倍以上に増え、全体の傾向に影響している可能性がある。性別は女性の割合が30.0%と前回の25.7%から約5割高くなっている。投票経験が「ある」と答えた学生は前回調査の54.1%より約9割高い。ただし、前回調査にあった「18歳になってから選挙がなく、投票に行ったことがない」という選択肢が今回はなかった点に留意が必要である。

西川（2017）が指摘した「若者が地元の成人式に出席するため、住民票を移さない事例が存在する可能性」を考慮し、「住民票を移しても地元の成人式に出席できる制度」の認知度を尋ねたところ、「知っている」が26.3%、「知らない」が72.8%、「その他」が0.8%だった。

さらに、投票経験の有無と上記の制度の知識を

重ねてグラフ化したのが図8である。投票経験のある学生153人のうち、この制度を知っていたのは49人(32.0%)、知らなかったのは104人(68.0%)だった。一方、投票経験がない学生90人のうち、この制度を知っていたのは15人(16.7%)、知らなかったのが73人(81.1%)、その他が2人(2.2%)だった。

このことから、住民票を移しても成人式に出られる制度について、まだまだ周知の余地があり、投票率向上につなげられる可能性が示唆されると言えよう。

次に、投票経験のある学生に対して、投票する理由を複数選択（3つまで）で尋ねた結果を、回答が多かった順にまとめたのが図9である。末尾に示した質問項目と対比させれば分かります。選択肢の順番とは整合しておらず、機械的に「上から3項目」などの形で選ばれたのではない様子うかがえる。

最も回答が多かったのは「国民としての権利を行使したい」で、投票に行ったことがある153人のうち54.9%が挙げていた。次いで「社会勉強になる」43.8%、「みんなが行くから」43.1%、「自分

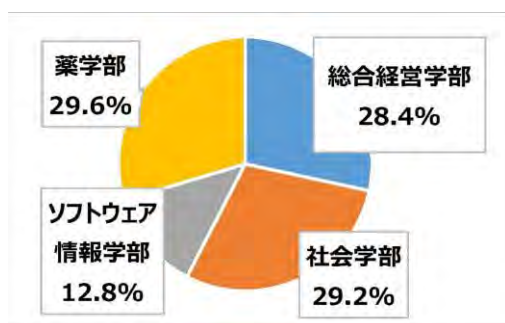


図5 回答者の学部

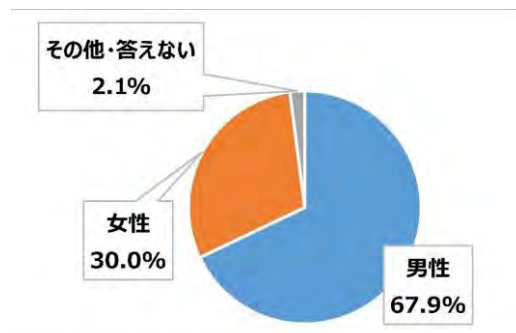


図6 回答者の性別

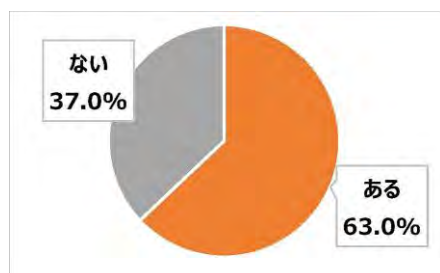


図7 投票した経験

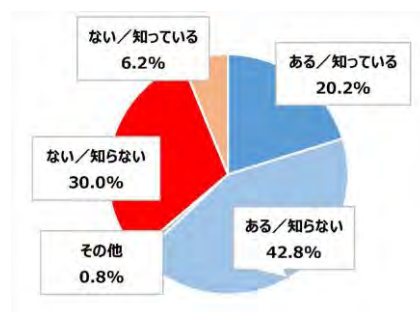


図8 投票経験の有無（ある／ない）と、住民票を移しても成人式に出席できる制度の知識（知っている／知らない）

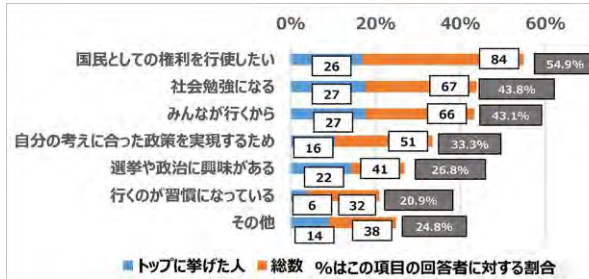


図9 投票に行く理由（複数回答・3つまで）

の考えに合った政策を実現するため」33.3%、「選挙や政治に関心がある」（26.8%）の順だった。

選択肢が異なるので単純な比較はできないが、前回調査は1位が「国民としての権利を行使したい」（46.5%）、次いで「社会勉強になる」（43.0%）、3位「自分の考えに合った政策を実現するため」（27.3%）、4位「投票率アップに貢献したい」（26.7%）、「行くのが習慣になっている」（15.1%）の順だった。「みんなが行くから」は9.9%で7位にとどまっており、今回との差異がどのような理由によるものか、解明する余地がある。

逆に、投票に行っていない学生（90人）に対して、行かない理由を複数選択（3つまで）で尋ねた結果を、回答が多かった順にまとめたのが図10である。「政治に関心がない」（54.9%）、「忙しい」（43.8%）、「各党・各候補の政策を知らない」（43.1%）、「若者向けの政策が伝わってこない」（33.3%）、「住民票を移していない」（26.8%）の順だった。

前回調査は「忙しい」（45.8%）、「政治に興味が無い」（45.0%）、「各党・各候補の政策を知らない」、「自分が投票に行っても何も変わらない」（25.0%）、「若者向けの政策が伝わってこない」（24.2%）の順だった。

今回の調査で興味深いのは、投票に行く学生の43.1%が理由として「みんなが行くから」を挙げたのに対し、投票に行かない学生の24.8%が理由として「周囲の大人や友達が行かない」を挙げたことである。この結果を見る限り「投票にみんなで行こう」という呼びかけは、一定の効果を上げる可能性がある、と言える。

自由記述で「選挙の仕組みで変えてほしいこと」を尋ねたところ、143件の回答があり、ネット投票（スマートフォンでの投票などを含む）の実施

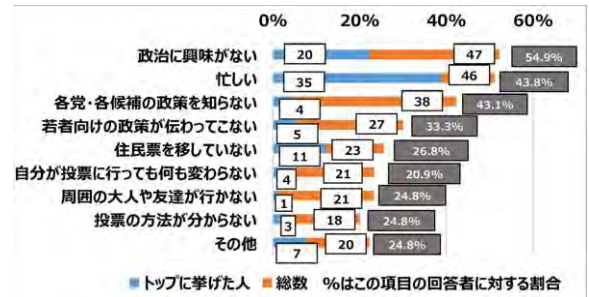


図10 投票に行かない理由（複数回答・3つまで）

を求める意見が約30件あった。また、投票所を増やす、投票の仕組みを簡単にする、期日前投票の期間を延ばす、といった要望・提案も約30件あった。さらに、住民票を移さなくても投票できるようにしてほしいという要望が7件あった。図11に、Microsoft Formsで自動生成されたテキストマイニング図を示す。

同じく「若者の選挙離れをどのような方法で防ぐか」に対しては233件の回答があった。ネット選挙の実施が約60件と最も多かった。また、「若者」をキーワードにした回答が66件あり、若者自身が立候補する、若者向けの政策を強化する、若者に関心を持つ選挙の仕組みを取り入れる、とい

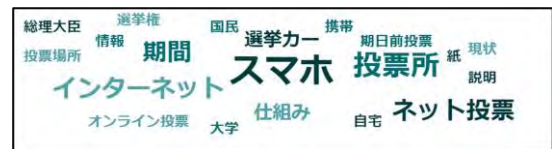


図11 「選挙の仕組みで変えてほしいこと」のテキストマイニング



図12 「若者の選挙離れ」対策のテキストマイニング



図13 「もし選挙に立候補したら掲げる公約」のテキストマイニング

った内容が目立った。さらに、投票した人に何らかの特典を与える、逆に投票しない人に罰金や罰則を科す、といった提案が 20 件ほどあった (図 12)。

同じく「自分が選挙に出るとしたらどんな公約を掲げるか」には 104 件の回答があり、「給料を増やす」「税金を下げる」「消費税減税」といった金銭に関する内容が約 30 件あった。このほか教育費や医療費の無償化、子育て支援、少子化対策に関する内容があった (図 13)。

## 5. 学生たちの反応

ヤングフォーラム 2023 に対して、キャリア特別実習の履修者が寄せたコメントの一部を抜粋、紹介する (回答内容はママ)。

- 数週間を振り返って、最初は 政治というものについて自分が関わるような事柄ではないという考えがあり思考停止していたことに比べ、今は同年代の人達の様々な意見を聞くことで影響を受け、他人事ではないと考えるようになりました。このことから、関わる人や環境によって意識や考え方は大きく変化する可能性があるのだと改めて思いました。また、馴染みがないことに対して関わらないようにして過ごすより、繋がりがあるということ意識して小さなことから関わりたいという意識を持つようになりました。
- 自分はそもそも選挙や政治についてほとんど何もわからない状態での参加だったのですが週を重ねるごとに意見も膨らみたくさんの知識を得ることができてとても嬉しく思います。これからはそれらを自分のものとして様々な方に発信していきたいです。
- 自分が発言する回数は少なかったが、仲間の意見などを聞き、仲間との友情も生まれたと思う。自分も人の意見には否定をせず肯定な意見を言えたのではと思う。
- 今まで選挙に無関心だったが、今回のヤングフォーラムで関心を持ち、更に若者がなぜ選挙に行かないかを理解出来たので良かった
- 未だに気持ちの整理がついておらず会場では話せなかったが、2年前に友達が自死してから他の友達は投票に行かなくなり、私も政治のニュー

スを避けてしまっていた。しかしフォーラムに参加するにあたって情報収集をしたり実際に議員さんと対話をしたりする中で、前向きな姿勢で政治に対しての方々のことを知り、私もこうあるべきだと考え方が変わった。社会や政治の大きな力に私の1票は小さすぎるように感じていたが、これからもめげずに投票に行こうと思う。また現在も自分の無知や無関心が原因で他者を傷つけてしまっているため、フラッシュバックを恐れずにもっと勉強をしようと思直した。

- 選挙について目を向けることができた。自分ができることは何か考えた時、例えば消費税が5%から8%、10%と上がったことに対してどうしてだろうなどと自分で気付くことが1つの入口になると思う。小さなことからでも意識して見ていきたいと思った。
- 私は選挙に関心がある立場だが、議論の中で興味がなく、投票に行かない人の意見を聞いたのが印象的だった。また、なぜか選挙の話題になると、腫物を触るかのような扱いをする人も、他の学生からの体験から聞け、人の選挙感を知ることができた。この体験を経て、自分はより選挙に関心を持たなければならないと感じた。
- 私は10月からコアメンバーとして参加してきましたが、初めは他学年と社会問題について考えることができて大変嬉しく思っていました。時間が経つにつれ、コアメンバーとの信頼性ができたおかげか、若者という立場から何ができるか考えて行動できるようになりました。私自身も関わったことがない活動であったためどこまでいけるのかというワクワク感とどれだけ理解してもらえるのかという不安のなか精一杯頑張りました。
- 最初、全く興味がなかったけど、コアメンバーが頑張ってる姿に引っ張られて真面目に聞くようになった。
- 私は、ヤングフォーラムがなかったら、全く政治・選挙に興味を示していなかったと思います。しかし、活動メンバーとして、議員さんにインタビューしに行ったり、会議などで意見を共有しあったりなど、気づかないうちに様々なことに挑戦していた自分がいました。政治の知識があまりない私ですが、こんなにも政治・選挙に



興味を持つなんて思ってもいなかったです。

- 自分自身が選挙には必ず行く人間なので、行かない人の気持ちが正直全く理解できずにいた。しかし、アンケート結果や学生の意見、インタビューでも多く聞こえた主権者教育の不十分さから、一概に選挙に行かない人の考え方に問題があると言えないのだと考えるようになった。
- 選挙についてここまで深く考える機会がなかったので非常に貴重な機会となった。アンケートから周囲の学生の率直な意見を聞くことが出来たり、議員にインタビューをしたり、毎週の授業で議論を重ねたりしてきた。その中で、若者は選挙についてどう感じているのか、議員は現状の投票率に何を思うのか、選挙制度や選管の取組等沢山の知見を得ることが出来た。投票率向上のための取組は他にもあると思うので自分でもっと調べていきたいと思った。ヤングフォーラムはここで一区切りとなったが、ここで止めるのではなく、これからも継続的に選挙について考えていきたいと思った。
- 選挙が自分にとってどんなものなのかという意識をもつためにも10代の主権者教育など選挙を考える機会がないとこれから先の若者の投票率が伸びていかないのではと感じた。自分もこれから投票がある時は公約など見て行くようにしたい。
- ヤングフォーラムに関することを聞き、選挙に対する意識が変わりました。今までは、選挙のことを聞きながらもあまり関心がありませんでしたが、今回の議論を聞き選挙について興味が湧き、少しずつ調べようと行動するようになりました。
- 選挙や主権者教育について考えるようになった。
- とてもしっかりしていて、個人個人がしっかり考えて資料などを作り熱意を感じた。高校ではここまで選挙について学ばなくて、人生でこれから選挙の参加率の問題について学ぶ機会はどう無いと思うので、参加して良かった
- 聞いていて非常に内容が良かった。個人的には進行がスムーズで内容が分かりやすかった。こうやって気軽に政治のお話を聞けて楽しかった。
- 市議・県議インタビューや、むつ市選挙管理委員会へのインタビュー報告や学生アンケートの結果、選挙管理委員会事務局からの報告等を聞き、現状若者が選挙に対してどう思っているの

か、また選挙へ行く人の傾向を知ることが出来ました。若者の投票率があまり高くないこと以外にも、みんなが選挙に行けばあまり関心が無い人でも選挙に行く傾向にあるなど、堅苦しいイメージがあるから選挙に行かないのではなく、周りの人物が選挙に関心を持たないからみんな行かないのかな、と私は思いました。

- やはり、今回のように学生が一生懸命になって頑張る姿。これは大学だからこそできるいい活動だと心から思っています。今後もやりたいと思う学生が増えることを願っています。
- 11月2日の東奥日報に東通村で中学生議会が開かれた記事を発見した。及川さん(注・県選管の担当者)も話していたが実績に残らないだけで実際は自治体毎に主権者教育に取り組んでいることが改めて分かった。

## 6. まとめ

ヤングフォーラムへの一連の取り組みを通じて、いくつかのポイントが明らかになった。例えば、学生たちが確認できた市町村選挙管理委員会による啓発活動は限定的な事例数だった。これは活動が行われていない訳ではなく、活動がネットで公表されていないことが大きな理由であり、フォーラムに参加した市町村選管関係者が翌週までに活動報告をネットに掲載するという成果が得られた。

また、履修者の多くは主権者教育を受けた記憶がない様子だったが、コアメンバーの中には、小中学校のころに啓発活動の「模擬投票」を学校で経験した学生がおり、その体験が「[コアメンバーとしての]活動に参加した原点となっていたことに気づいた」と証言した。つまり、この種の取り組みが有効であること、同時に、情報やノウハウの蓄積と発信、共有に、まだまだ改善の余地があることが確認された。

同時に、主権者教育をめぐり、教育委員会と選挙管理委員会の連携の必要性も浮かび上がった。

当日の議論を通じて、主権者教育の重要性があらためて確認されるとともに、模擬投票などの営みの意義や情報を共有し、蓄積し、深化していく仕組みが十分に機能していない現状も明らかになった。

若者の投票行動をめぐる「政治に関心がないから投票に行かない」あるいは「意識が高い若者が投票に行く」といった見立てがされがちであ



る。だが、今回の取り組みを通じて、履修者に「親や友達に選挙の話をしてみよう」と提案したところ、「話を切り出せなかった」「お前、大丈夫か、と言われた」といった反応があったという。

加えて、本稿では詳細を記せないが、選挙に「行くに行けなくなった事情」を抱えた友人たちがいる学生から「選挙に行けない人(友人)の代わりに自分が行っている、罪悪感というか、そういう意識から選挙に私は行ってる」という証言があった。

むつキャンパスの学生からは「最近行われた、むつ市議会議員選挙でも、公約を見ていて高齢者や福祉、介護に力を入れてる人が多く、若者向けの政策がないがしろにされてるのかな、と若干思った」という意見が出た。

このほか「現時点で投票率の低い自分たち若者が、今の高齢者の年代になった時に、投票率はいったいどうなっているのか」という提起があった。

数字の上だけで低投票率を嘆いてみせる前に、個別の学生のさまざまな思いに耳を傾け、胸の内を探るだけで、多くのヒントが見えてくるのではないか。

例えば、「投票に行ったことがない」と答えた学生の中で「周囲が行かないから」という回答割合は23.3%であるのに対し、「投票に行ったことがある」と答えた学生の中で「周囲が行くから」を理由に挙げた人は43.1%あった。これが本学固有の現象なのか、確認する必要がある。加えて、今後の「若者の投票率向上」を論じる上で、このような状況をどう考え、どのような対策を講じるかが、焦点の一つになる。

## 7. おわりに

一連の報告と提起、対話を通じて、より良い政治の在り方を目指す手段としての選挙・投票、そのプロセスを担保するさまざまな仕組みの現状と課題、等々をめぐり、「投票率の向上」そのものを目的とする仕組みに一定の限界を感じざるを得ない。

もっばら、最終的な「数」が取り上げられ、改善・向上がうたわれる投票率、ひいては民主主義や地方政治の在り方をめぐり、このような若者たちの声が存在することを、まずは意識するべきではないかと考える。

例えば、フロア参加した青森大学生からは「20

代の主権者意識を改革するための働きかけ」の必要性を提起する声が出た。

このような視点そのものが、これまでどこでどれだけ論じられてきたか、検証する必要性を感じた。

他方、フォーラムの2週間前の授業において「別に投票率が上がらなくてもいいんじゃないか」という提起が学生側からなされた。決して現状を追認・容認する意図ではなく、「投票率や政治、選挙には関心がないという自由」を認めるべきだ、という趣旨の主張だったと、担当教員としては理解している。

この提起にはさまざまな反論があり得るが、一連のヤングフォーラムを取り巻く場が、それぐらいの自由度の高さを志向し、許容していたことの証左としたい。

第5章に紹介したように、一連の取り組みに対する学生の肉声はいずれも力強い。たとえささやかな営みでも、授業や大学生活を通じて、学生と教職員、実社会の人々が、互いを元気づけて成長させ合う仕組みが稼働したように感じる。中でも、フォーラムで学生が発した「教育は0から1を生み出すのに最適な役割」という言葉は、当事者が編み出した至言と感ぜられる。このような声を糧に、今後もさまざまな試行を重ねていく必要性を感じる。

## 謝辞

ヤングフォーラムの実施に際しご支援ご協力いただいた青森県選挙管理委員会の皆さま、特に担当の及川侑紀氏、ヒアリングにご協力いただいた議員の皆さま、そしてアンケート実施にご協力いただいた青森大学生と教職員の皆さまに心より御礼申し上げます。

なお、ヤングフォーラムを担った学生たちは、2023年度の青森大学地域貢献賞において、第2席の優秀賞を受賞したことを付記します。

## 注釈

- 1) NHKサイト「青森大学とコラボ！ 若者にとって選挙って？大学生が調査」(<https://www.nhk.or.jp/aomori-blog2/3010/470181.html>)=2024年2月24日最終閲覧)
- 2) この企画に取り組んだ学生グループは2022年

度の青森大学地域貢献賞・最優秀賞を受賞している。

- 3) インタビュー対象者の間にも、県内では模擬投票が行われていない、または不十分だという認識が存在するが、後述のように、実際には情報が十分に公表されていないだけで、一定の頻度・割合で実施されている。

#### 参考文献

櫛引素夫 (2022) 「NHK青森と連携し『参院選プロジェクト』展開」, 青森大学附属総合研究所・

総研だより, 4(1), pp.6-10

櫛引素夫 (2023) 「若者の投票率向上策探る『ヤングフォーラム』実施」, 青森大学附属総合研究所・総研だより, 5(2), pp.19-20

櫛引素夫・相坂匠飛・雷霄峰・石倉翠聖・工藤康晴・鈴木流由・三上愛莉 (2022) 「青森大学生は2022年参院選をどうみたか—NHK青森との協働による学生アンケートと授業実践から—」, 青森大学附属総合研究所紀要, 24(1), pp.30-48  
西川伸一 (2017) 「18歳・19歳有権者は選択する」, 学術の動向, 22 (1), pp.17-20p

---

## Verification and Dialogue on Increasing Youth Voter Turnout;

From the Practice of "Young Forum 2023" at Aomori University

KUSHIBIKI Motoo<sup>1</sup>, IKEDA Shuma<sup>2</sup>, OHNO Airi<sup>1</sup>, KATOH Mihiro<sup>1</sup>,  
KIMURA Takumi<sup>1</sup>, TAKAHASHI Yusei<sup>1</sup>, FUJITA Kanade<sup>1</sup>, MIURA Saya<sup>2</sup>,  
YAMADA Sora<sup>3</sup>

1 Faculty of Sociology, Aomori University

2 Faculty of Business Administration, Aomori University

3 Faculty of Software and Information Technology, Aomori University

### 要 旨

青森大学の科目「キャリア特別実習」で2023年11月、青森県選挙管理委員会の主催により、若者の低投票率をどう理解してどんな対策を講じるかを考える「ヤングフォーラム2023」が開催された。約2カ月にわたる授業での対話および学生たちの調査活動の成果が報告された。青森県議会議員らへのインタビューの結果として、議員たちも低投票率を問題視していること、体験型主権者教育の拡大やネット活用に希望を見いだしていることなどが明らかになった。また、学生アンケートの結果として、3人に1人は投票体験がないこと、ネット投票や若者向けの施策を望む声が強いことなどが確認できた。住民票を移さないため投票できない学生が多い半面、住民票を移しても出身地での成人式に出席可能な制度があることを知らない学生が多く、今後の対策への示唆が得られた。

キーワード：青森大学，青森県選挙管理委員会，低投票率，主権者教育，アンケート